縁切習俗の現在

――板橋の縁切榎・門田稲荷・野芥縁切地蔵尊――

松崎憲三

はじめに
一、先行研究小史
二、板橋区・縁切榎
三、足利市・門田稲荷
四、福岡市・野芥縁切地蔵尊
結びにかえて

はじめに

島根県の出雲大社は縁結びの神としてよく知られており、松江市の八重垣神社、千葉県木更津市・高蔵寺の縁結び観音等々縁結びにご利益のある寺社、神仏は各地に存在する。また道祖神は男女の縁を結ぶ神とも信じられており、樹木の中にはその形状によっては縁結びの対象として拝まれるものもある。二股となった樹木や、大小さまざまなコブのある樹木などが縁結びの木と呼ばれ、良縁を願う対象となっている。

二〇一三年の三月に島根県の境港や松江、出雲方面に出向いたが、その頃次のような話を耳にした。東京から夜行寝台列車で山陰方面に向かう若い女性の小グループが目立つようになった。個室寝台を借り、二・三人の仲の良い友達同士で軽くアルコール類を口にしながらおしゃべりを楽しみ、出雲大社に出向く。そこで文字通り祈願をした後、美肌効果で知られる玉造温泉に泊って帰るのだが、週末ともなれば満席状態だという。晩婚化が進む一方で、このように祈願は盛んになりこそすれ衰えず、関東周辺ではパワースポット巡りも目立ち、縁結びにご利益のある神仏は女性で長蛇の列だという。

縁結びの祈願があれば、他方では男女や夫婦の縁を切りたい、数多のしがらみを断ちたいという縁切の祈願もあって、こちらも負けず劣らず盛んである。鎌倉市松ガ岡の東慶寺、群馬県

太田市徳川の満徳寺、こちらはともに千姫ゆかりの寺院で、近世縁切寺としてよく知られていた。このような格式のある寺院ならずとも、佐藤孝之の『駆込寺と村社会』（吉川弘文館　二〇〇六年）によれば、地域社会には駆込寺的機能を果たした寺院が各地に少なからず存在したようである。一方、縁切り信仰の対象となっている寺社、小堂・小祠、石仏は至る所に存在する。京都市東山区にある安井金比羅宮は、交通安全のほか各種断ち物、縁結びにご利益のある神社として知られていた。ところが近年は縁切もご利益に加わって盛況をきわめている。形代に願い事を書き記し、それを持って境内にある高さ一・五メートル、幅三メートルほどの絵馬の形をした巨石中央下の穴（トンネル）をくぐるのだが、表からくぐって形代を石に貼ると縁切に、裏からくぐると縁結びに効験があるという。「悪縁を断ち切って良縁を」というのが人々の思いだろうし、縁切と縁結びとは裏腹の関係にある。その意味では驚くに当たらない。むしろ、現代の風潮を嗅ぎ取った神社側の配慮（経営戦力）にこそ敬意を表したい。

ところで縁切とは、日本民俗大辞典によれば、「男女間の問題に関する神仏への、絶縁祈願の慣行や絶縁に関する禁忌、俗信、忌避行為」だという。[1] この項の執筆者は小泉凡であるが、東京都板橋区本町の縁切榎を取り上げた後、「そのほか各地に嫁取り橋、縁切橋、縁切地蔵、縁切薬師などの呼称が存在する。これら縁切の伝承のほとんどが、何らかの境界地点に結びついて語られていることは、古来外界から侵入する有害なものの防除を願ってそこに神を意識

し、橋姫やサイノカミが境界にまつられた経緯があり、後世妬みという強い感情を持つ神こそ境界神にふさわしいという意識が生まれ、このような縁切の俗信が派生したものと考えられる」としている。[2] 古来榎が国境（くにざかい）や橋の袂などにあって境を榜示する木、との前提もあって、このように結論づけているのだが、一方で「榎は『エンノキ』という語呂にちなむゆえに各地で榎が縁切の対象としてひろまったことも推測できるが……」とも述べている。[3] 後で触れるように、語呂合わせこそがこの種の信仰の広がりにとっては重要な要素と見るのが自然である。ただし、どちらか片方だけが要因と考える必要もないだろう。

いずれにせよ縁結びも、縁切も現在なお盛んな習俗といえるが、小稿ではそのうち縁切に焦点を当てることとし、東京都板橋区本町の縁切榎、栃木県足利市八幡の門田（かどた）稲荷、福岡市早良区の野芥（のけ）縁切地蔵尊を取り上げ、歴史的変遷を簡単にトレースした後、信仰の現状を明らかにしたい。

一、先行研究小史

祈願方法を八つに、すなわち参拝、参籠、奉納、禊、祓、自虐、鎮送、対抗、強請に類型化したのは井ノ口章次である。[4] このうち奉納では、今日絵馬のそれがよく知られており、中でも

小絵馬奉納による祈願は、合格、病気平癒等を目的としたものが目立つ。また、男女が背中合せに描かれた小絵馬があって、男女の縁切にはこれがもっぱら使われてきた。絵馬研究の第一人者である岩井宏實は、さまざまな小絵馬を紹介する中で次のように述べている。(5)

世の中にはまた、縁切を叶えてくれるというかわった神様もある。京都の菊野大明神は、昔三条東洞院あたりにあったが、三条東洞院は嫁入りとか縁事のとき通れば縁が切れるという言い伝えがある。深草少将が小野小町のもとに百夜通いつめたが、想いかなわず死んでしまったので、往復に腰かけて休んだ路傍の石にその怨念が憑き、男女の縁を呪ったという伝説をもとにした俗信であろう。菊野大明神にはこの石が祀られていて、たくさんの縁切絵馬がかかっている。祈願の多くは妻・姉妹・母らが夫・兄弟・息子と情婦の縁切を祈願するもので、絵馬をかけるとともに、小祠の裏に願文を書いて貼りつけている（傍点筆者）。このほか京都には縁切の神仏や祈願所が何カ所かあるが、いずれも当事者二人が背中合せに坐っている図が普通である。

岩井の著書の中では、菊野大明神の小絵馬は紹介されていないが、足利市・門田稲荷の着物姿が背中合せで坐っている図柄のもの、榎の木を真中に着物姿の男女が背中合わせにうつむきか

写（1） 板橋区・縁切榎絵馬（岩井『絵馬』1974年より）

げんに立ち尽くす板橋・縁切榎の小絵馬は紹介されている（写（1）参照）。その上で、「夫婦の縁切りのみならず、病気との絶縁、盗人、酒との縁切れから兵役逃れというように断絶を目的とするものなら何でも祈願する」としており、その図柄にこだわらず、既に縁切りが多様化している点を指摘している。[6] なお、先の引用部分について言えば、「絵馬をかけるとともに、小祠の裏にその願文を書いて貼りつける」といった記述に留意しておきたい。祈願者はこの時点で―一九七〇年代前半―絵（図柄）に願いを託すだけでは物足りないと思い始め、合わせて願文を奉納していたのかもしれない。この点については改めて検討することになる。

板橋の縁切榎については、十方庵の『遊歴雑記』や『新編武蔵風土記稿』等文化・文政期の紀行文、地誌の類にも記載があって古くからよく知られ、柳田國男も『神樹篇』の中の「争いの樹と榎樹」の章で次のように述べている。[7]

又有名な板橋の縁切榎なども、実はいつの間にやら欅の大木であった。今では火災に遭うて枯株のみ残り、愈々本体が不明に帰したが、嫁入の此樹の前を通ることを忌んだ風習は古かった。寛延二年の二月に五十宮将軍家への降家の際にも、其由来を述べて御路筋変更を進言した者がある（傍点筆者）。最初この地には榎と槻と各々一本があって『榎木槻木岩の阪』と唱えたのが娯って『縁つきいやの阪』と為ったと言って居る。但しその榎が早く枯れて、槻ばかり残ったということには証拠も無く、欅を縁切榎と呼んでいた期間は久しかったのである。

樹々の争いについてはともかく、ここでは榎と槻が双生しており、語呂合せから「縁尽き」、「縁切」となったという説に柳田が言及している点を確認しておきたい。また傍点を付した部分については、次節で改めて触れることにしたい。

このほか富士講の伊藤身禄は、入定に際して縁切榎で妻子や弟子達と別れ、富士山に向かったとされており、それについては小平波平六が報告している[8]。こうした先行研究を踏まえて縁切榎の歴史的展開をトレースした長沢利明は、「このように『縁切何々』とよばれる神仏や樹木・岩石・橋などはいろいろな所にありそれらは概して特別な意味を帯びた地点であり」、「その神聖性に対する畏怖、あるいは不浄性から回避のためのタブーがしかれていた」、「樹齢を重

ねた老木・巨木などはすでにそのような存在であり」、「板橋の縁切榎も『縁つきいやの坂』という語呂あわせから」、「特別な地位を与えられてきた」と結論づけている。[9] 長沢の論に特に異論がある訳ではないが、筆者の関心は縁切習俗そのものの実態、すなわち、その歴史的変遷と現状を把握することにある。なお、近年常光徹も縁切り榎に言及し、榎と欅という隣接する二本の木が合着して成長する形を縁結びの姿とみなし、一方の榎が枯れたため「縁が切れた」「縁を切った」と考え、「縁切り榎」の名称で呼ばれるようになったのではないか、との論を展開している。[10] ちなみに縁切り榎の場合、「縁結び」といった信仰の痕跡をうかがい知ることができるのだろうか、気になるところである。また、仮に常光の見解通りだとしても、「縁つきいやの坂」といった語呂合せの軽妙さがこの信仰の流布に与っていたことは、言葉遊びが好きな日本人の性癖からして確かだろう。

一方足利八幡宮境内社の門田稲荷については、大正期の『郷土趣味』、『郷土研究』といった雑誌に簡単な報告例があるにすぎないが、近年女性雑誌や新聞に時々取り上げられており、そのためその名はあまねく知れわたっている。

最後に福岡市・野芥縁切地蔵についてであるが、近世の地誌に記載があり、こちらも早くから知られていた模様である。そうして、佐々木哲也が昭和四十八年（一九七三）年刊『九州の民間信仰』の中の分担部分福岡県の「呪いの神・祟り神」の項で簡単に触れている。[11] 幸い堂内

に小絵馬がビッシリと掲げられた場面の写真もあって、それはやはり男女が背中合せでうつ向いている図柄である。今日ではこの種の絵馬は稀で、願文を封筒に入れて画鋲で貼りつけたものが圧倒的に多く、この間の習俗の変化がうかがえる。

二、板橋区・縁切榎

平成元年（一九八九）に刊行された『いたばし郷土史辞典』の「縁切榎」の項には、次のように記されている。[12]

江戸時代から知られていた縁切榎は現在三代目か四代目といわれ、旧中山道の西側（本町三三番）にあったが、昭和四四年現在地に移され地元で守られている。[a]一説によると榎と欅（ツキ）が双生していたのでエンツキと呼ばれ、縁が尽きるという俗信が生まれたという。江戸時代には夫が妻を離縁するのは容易だったが、妻から離縁を申し出るのは認められなかった。[b]離別を望む妻は縁の切れるのを願い、密かに榎の樹皮をお茶などに混ぜて飲ませたという。また、[c]富士講の行者伊藤身禄はここで妻子と別れ、富士に向かったという。[d]宮家の息女五十宮や楽宮が将軍家に降嫁の際には縁切榎を避けて村道を通り、皇女和宮が降嫁

の折りには榎を根本から梢まで弧で包んで隠したといわれる。

以上であるが、辞典であることから、それなりの根拠を元にまとめたものであることは言うまでもない。そこで傍線を付した（a）～（d）について改めて確認することにしたい。先ず（a）と（d）である。

中山道は、徳川将軍の嫡子が皇族・摂家の姫君を迎える時の下向路としてたびたび利用されている。享保十六年（一七三一）の比宮（家重の室）、寛延二年（一七四九）の五十宮（家治の室）、文化元年（一八〇四）の楽宮（家慶の室）、天保二年（一八三一）の有君（家定の室）、嘉永二年（一八四九）の寿明君（家定の継室）などがあげられる。中でも文久元年（一八六一）に行われた孝明天皇の妹、和宮親子内親王の家茂への輿入れは、中山道史に類をみない最大規模の行列になったという。[13] このうち寛延二年三月の閑院宮直仁親王の息女五十宮の降嫁についてであるが、柳田も触れているように下向直前に巣鴨原町一丁目角左衛門店源右衛門他一名より、「縁切榎の前を通らないように」と次のような注進があったという。[14]

今度五十宮様御入府被為遊候御街道筋、中山道下板橋通りと奉承知候。乍恐此街道筋に付御注進申上候右下板橋はづれ近藤登殿下屋敷の垣際に榎木槻木一処に生立数年を経、殊之外

大木に御座候処、何の頃より誰申共なく榎木槻木いわの坂をゑんつきいわの坂と申習わし、此処を縁女聟入等の者通り候へば、必縁短く御座候由申来り、近在の者は不及申、承及候程の者、縁辺之者一切通り不申候。木の前に七五三など張置申候。委細の儀、彼処之者能存知可申候。下々の俗に申候儀何共申上候も、恐多奉存候へども偏に只幾千代も御長久、御繁栄を奉仰願候故、乍恐右之段御注進申上候云々

ここには、（a）「縁つきいやの坂」のいわれが述べられており、これによって（d）五十宮の一行は中山道の本街道を避けて根付道を通過の上江戸に入ったという。源右衛門らはその功により、銀一枚を褒美として与えられた。その後の楽宮の場合も同道の経路を辿ったようであるが、皇女和宮の場合は、『いたばし郷土辞典』に記されているように、「榎の根元から枝葉の果てまですっかり見えぬよう、厳重に全体を菰に包んで」通過したと伝えられている。[15] 源右衛門の注進に関する文書、そして和宮に関する言い伝えは、いずれも昭和二九年（一九五四）刊の旧版『板橋区史』に記載されているものである。残念ながら文書の所在や注進年月日等は明示されていない。

さて、（c）との関連で小花波の「板橋の生活と民俗」を取り上げる。本論文は板橋宿（含縁切榎）を別れのトポスとして論じたもので、その中で身禄入定に伴う別れの場面に言及して

いるのである。身禄が富士講中興の祖として神格化されつつあった明和八年（一七七一）に、中雁丸豊宗によってまとめられた『食行身禄御由緒伝記』によりながら論を進めている。それによれば、享保十八年（一七三三）の六月一日から身禄は入定の準備にとりかかり、同年六月十日がいよいよ富士へ出発する別れの日となるが、妻子、同行衆との別れの宴の後いよいよ板橋宿で分かれとなる。その様子について伝記には次のように記されている。

程なく平尾町に御着被成、食行尊、仰せには我も此所にて、ゆるゆる支度をいたし出立致候間、みなみなも、わらじを取上げて支度致し候へ、暇乞をも可致と仰せられし故、何れも長四郎宅へあがりける。兼て仰合なり長四郎御馬も出来申候、ちょっと鞍の味を召て御覧候得、若しあしくば今の内直させ可申候へば、食行尊御心得被成候、馬に召され候はば何の御言葉もなく、御馬をはやめて、御出立被成候得ば、御送りの人々あきれ果て、からだちにて、追かけ申候よし、御妻子方のあまりいたわしさに同行の内にて御末子のおはなを抱きて追かけ申候へど御急ぎ被成候はば追いつけ奉らず、道の程二里余りも追掛申候、さすが御親子及御困之同行、誠に天も感応なし玉ひけるにや、道はたの榎の枝に御笠をかけられ、はずし玉わんと色々に被成候て、手間取り、うしろ御ふり返り御覧被成候て、食行尊、後には必寄り付き申すまじくと、御見返りもなく、御急ぎ被成云々。

こうして上吉田に到着し、六月十四日に入山、烏帽子岩で三十一日に入定した。小花波は、伝記では縁切榎が平尾から二里も離れたことになってしまっていると指摘し、さらにこれが改作され「不二山烏帽子岩　吾妻立和讃」が作られたとしている。[16] 伝記や和讃には多少の誇張はあれ、身禄は板橋宿と縁が深く、また寛延二年の五十宮降嫁以降縁切榎は広く知られており、身禄入定に際しての永遠の別れの演出としては恰好の舞台であり、明和八年の伝記はその点を踏まえて記述されたものと推測される。

ところで旧版の『板橋区史』には、近世歌われた縁切榎関連の川柳まで掲載されている。大変興味深いので、ついでながら紹介することにしたい。[17]

（ア）板橋へ三下り半の礼詣り
（イ）板橋の榎と女房心づき
（ウ）板橋の木皮の能は医書に洩れ
（エ）榎で取れぬ去り状を松で取り
（オ）榎でもいけぬと嫁は松で切り
（カ）板橋で別れ鎌倉まで行かず

以上の六句であるが、（エ）～（カ）の「松」とか「鎌倉」とあるのは、鎌倉市松ガ岡にある東慶寺をさし、縁切榎が江戸近郊の街道筋にあっただけに、東慶寺と並び称されるほど知られ

ていたことがわかる。また（ウ）は『いたばし郷土辞典』引用部分の（b）とかかわるものである。これについては、十方庵の『遊歴雑記』に詳しい。[18]

（前略）。何者かはじめけん、此処へ来り、茶店の嬢（カカ）又は児童等をたのみ、此榎の皮を扮取（ソギトリ）もらひて、家に持ち帰り水より煎じ、その者にしらさず飲しなれば、男女の縁を切、夫婦の中自然に飽捲（アキウミ）て、離別に及ぶ事神の如しといひはやし、心願かなふて後は、絵馬を持ち来たり榎へかくるもあれば、又幟（のぼり）たてる徒もありけり。いか様（さま）絵馬懸しを見れば、男女もの思える風情して、双方へたち分る姿を画きしは、不仁の志願も叶ふと見えたり。又、大酒を好み癖ある上戸に、此榎の皮を水より別煎にし、酒へ和して飲しむれば、忽然と酒を嫌ひ、性質下戸になるといひ伝ふ。（後略）

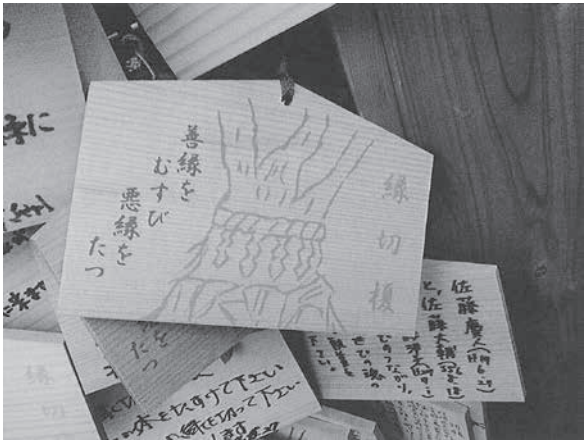
榎の木の皮は、男女の縁切のみならず酒断ちにも効験があるようである。いずれにしてもこれを相手に飲ませ、願いが叶ったら御礼に絵馬を奉納した模様である。それ故にこそ川柳に、「板橋へ三下り半の礼詣り」と歌われたのである。幟を立てるというのも御礼詣りの一環にほかならずそこまでおおっぴらにして良いものかとの思いもあるが、ようやく念願叶った人の正直な気持、喜びがそこに端的に示されているものといえる。

写（2） 板橋区・縁切榎絵馬（板橋区立郷土資料館蔵）

なお、ここに記されている絵馬は、多分岩井が示したようなものだろう。しかし、板橋区立郷土資料館には、七五三縄を張り巡らした切株に向かって主婦が着物姿で坐って一心に拝んでいる図柄のものも所蔵されている（写（2）参照）。多分こちらの方が新しいものだろう。そして現在のそれは、朱で切り株をプリントしたもので、「善縁をむすび悪縁をたつ」と赤字で記されたものであり、男女の縁切のみならず多様な悪縁との縁切を願う、現代人に対応した絵馬となっている（写（3）参照）。しかしながら今日では、絵馬の図柄に願いを託すというよりも、もっぱら文字でメッセージを送る点に主眼が置かれ、絵馬の裏面には奉納の思いがビッシリ書かれたものが目立つ。また現在では、榎の皮を煎じて相手に飲ますことは省略されており、そのことと連動して御礼詣りに

絵馬を奉納するのではなく、祈願に際してあらかじめ奉納するというものである。

ちなみに、長沢によれば榎の樹皮は近代に入ってからも用いられていたようである。そうして明治二十一年（一八八八）に平山省斎率いる神道大成教がここに祈祷所を設けて大成教榎教会を名乗り、同教教師の金井豊儀が第六夫と榎とを管理するようになり、参拝者には神符と奉納用の小絵馬を頒布した。その神符の中には「縁切の御符」というものがあり、その中に榎の樹皮を粉にしたものが入っていたとのことである。昭和十一年（一九三六）に同教会の金井師がなくなると、未亡人や留守居役が教会を維持したものの昭和四十四年（一九六九）に後継者が途絶えて教会は閉鎖された（関連資料は板橋区郷土資料館に寄贈）とのことである。昭和五十六年（一九七六）以降は地元



写（3） 縁切榎絵馬（2012年正月、松崎撮影）

の人々で組織する「榎第六天神奉賛会」の手によって管理されている。[19]

最後に、平成二十五年（二〇一三）一月二日に訪れた際に目に止まった願文から、主だったものを紹介することにしたい。先ずは古典的な男女の縁切関連のものを上げる（なお姓名については、イニシャルを用いることとした）。

（1）悪婦・悪妻「T子」と縁切が出来る様お願いします。平成二十四年九月十九日。白子・A（男性）。

（2）どうか大好きなSOさんが離婚して、自分と幸せな縁で結ばれます様に。H24、12・21。HM（女性）。

（3）TR（男性）が浮気相手のOS（女性）とできるだけ早急に完全に縁が切れるように完ペキに縁を切ってください。Rが一日も早く私のもとに戻りますようお願します。Rが戻る際、女グセ、浮気グセ、借金グセの縁を切って下さい。「縁切榎」様どうか宜しくお願いします。RとOとの縁を完全に切って下さい。

（1）のような離縁で男性の奉納者というのも、少ないながら存在する。（2）と（3）はどちらとも不倫とかかわるものであるが、（3）のくり返しの表現から切々とした思いが伝わってくる。さて次にあげるのは様々な人間関係の縁切祈願である。

（4）ここに名前を書くのははばかられますが、大嫌いな夫婦がいます。早くこの夫婦が私

の記憶から消えますように。縁も切れることなら切れますように。

（5）父の掃除機、鉄道グッズ等がなくなりますように……。悪縁が切れて良縁が訪れますように。K.（男性）の籍が取れ（切）れますように。N子。

（6）今の職場と上司の皆様と縁が切れますように。東京に上京して幸せになれますように。二〇一二．四．二〇。

（5）は夫と舅の遺品から解放されたいというのだろうか。また（6）は、現職場の面々と縁を断ち、上京して良い職につき、望ましい人と出会いたいということだろうか。病気に関するものは相変わらず目立つが、二例だけ紹介するに留める。

（7）早く病気と縁が切れます様に願います。かならず。M子　二〇一二．四．二一。

（8）借金と自堕落な生活との決別をお願いします。また全ての病いから無縁になりますように。K（男性）。

（7）はきわめてシンプルな願文である。また（8）のように金銭にからむもの、さらには現代の世相を投影したものも中には散見される。

（9）I・K・（男性）昭和四十四年生子年と前世から関係のある今現在沖縄の土地開発のトラブルのある方と縁をお切り下さい。よろしくお願いします。

（10）縁切榎様、低所得の縁が完全に切れます様に。高所得になる様お願い致します。何卒

宜しくお願い申し上げます。二〇一二．一一．二四。H．T．（男性）。

（11）不登校よさようなら。H24、3．25．R（女性）。

数多ある願文のうち、アトランダムに目に止まったものを例示したにすぎないが、『遊歴雑記』が著わされた近世の文化年間においては、男女と酒との縁切だけだったことを思うと隔世の感がある。

三、足利市・門田稲荷

丸山太一郎は、大正三年（一九一四）に『郷土研究』二巻一号に寄せた「八幡村の縁切稲荷」なる小報告の中で次のように述べている。[20]

足利市西南十五六町を距つる山辺村大字八幡に鎮座する県社八幡宮の境内に、近年境外より移した九尺に二間程の小祠がある。本名は正一位門田稲荷大明神と称する由成れど、門田稲荷と聞いて村民も知らぬものが多い位で、何年頃からか如何なる理由（わけ）で縁切稲荷などと言い伝えたか、更に不明であるけれども、誰言ふとなく夫婦別れの御願ひを初め、足繁く妾宅通いをする旦（だん）つくと妾との間に秋風を立たせたり、又内を外に遊び巡る宿六に情婦と手を切

らせる位はお安い事で、難病の根切り其他總(すべ)てのものと縁を切りたいと云って願ひさへすれば、霊験あるとの話である。論より証拠、お礼に納めた男女背中合せの図や、左右反対に歩む絵馬が社の回りに隙間なく打ちつけてある外、社内に累々積重ねてあるのと、其一年間の賽銭が県社より多いと聞いては實に其御繁昌に驚かざるを得ない。然し願事が願事で殊に人足繁き村道の傍故、昼間の参詣人は余り見受けぬが、夕景から足利方面から来る供をも連れぬ丸髷(まるまげ)の後影(うしろかげ)や、泣児(なきご)を背負ふた櫛巻姿の一人二人見ぬ日はないと云ふ話である。

字宮前にあった稲荷社が、明治四十五年（一九一二）に神社合祀によって県社足利八幡宮に移祠されたようだが、本名の門田稲荷より縁切稲荷の名で知られ、しかも本社より実入りが大きかったようである。末社の方が本社より名を馳せたといえば広田神社の西宮戎を彷彿させるが、大正期にはそれなりに知られ、男女の縁切に限らず当時から広い範囲の縁切に効験があった模様である。ちなみに、平成六年（一九九四）九月二十九日付夕刊フジ「嫁姑、離婚、商売敵、不倫、親戚……縁切ります」なる記事は、「姑との縁が絶対切れますように。××（夫）、××（妻）」、「交際している××子からのいやがらせ、長男に対してのいやがらせいろいろあり。無言電話、嫁の実家にまでいやがらせの落書きや、オブツの投げ入れがあったり、会社への投書があったり、誰がしているかわからず早く縁が切りたく、お願いします」等々のほか、

「〇〇商会倒産しろ、この世からなくなれ、つぶれろ、自滅しろ、二度と立ち上がれなくなれ、今からやることなすことうまくゆかなければいい」といった願文をいくつか紹介している。また絵馬にまじって、クギで無数の穴が空けられた柄杓や、五寸クギで貫かれた藁人形も吊され、写真つきの藁人形も二体あった」と、生々しい様相を記している。

先代宮司によれば、元々は近隣の人が人知れず訪れていたにすぎなかったものが、平成の初期頃に女性雑誌に取り上げられて知れわたるようになり、その後再三マスコミに登場して全国から問い合わせや相談が殺到し、本来の勤めにも支障が出るほどだったそうである。「それだけ、簡単に言い表せないほど深刻な悩み。本来私の仕事ではなく、カウンセラーなどの分野だと思うのですが、女の人から泣き声の電話がかかれば、むげに断るわけにもいかないのです」というのが宮司の弁である。

この記事を目にして逸早く駆けつけねばと思い、早速足利へと出向いた。朱の鳥居をいくつもくぐって小さな社殿の前に辿り着くと、絵馬懸が一棟あって、前面には木製の底抜け柄杓が数多く吊るされていた。願いが通ずるようにと底が抜かれたもので、縁切に限らず稲荷らしく商売繁昌、家内安全等を祈願したものもあり、夕刊フジの記事・写真との落差に唖然とした。しかし絵馬懸の裏に回ってみると、藁人形に写真まで添えて釘を刺したものが数多く見かけられた。相手の実名を書いて「死ね」と書き記しているものまで目に入って来た。不安や葛藤、

写（4） 足利市・門田稲荷絵馬（岩井『絵馬』1974年より）

憤りが昂じてくると怨念となって発露するのかと空恐ろしくなってしまった。夕刊フジで見たように、願文だけのものでもその内容のおぞましさは今更言うまでもない。

平成六年（一九九四）十二月十八日付東京新聞「いじめ地獄……僕を助けて〝縁切の神様〟足利門田稲荷　師走の境内　増える子供たち」は、文字通り「いじめ」にからめて報じたもので、最近のいじめの風潮に対応して、それに関連する絵馬の奉納、参拝者も確実に増えているという。ちなみに今日用いられている絵馬は、かつてのそれ（写（4）参照）と異なり鳥居を真中に狐が向かい合っている図柄のものである（写（5）参照）。丸山が報告した当時のものとは異なる。さて、先の記事は次のような内容である。絵馬の研究家で、地元の「足利絵馬の会」会長の小倉喜兵衛さ

写（5） 足利市・門田稲荷絵馬（2010年３月、及川祥平氏撮影）

ん（六二）が今月上旬、門田稲荷の境内でぼんやり立っている高校生らしい少年を見かけた。声をかけるとポッツリ、ポッツリと同級生からのいじめ話をし始めた。親や先生にも相談できずに、「何とかいじめっ子との縁を切りたい」とすがるような気持ちで埼玉県上尾市から訪ねて来たのだという。小倉さんは思わず少年と一緒に手を合わせ、「真先にこの子の縁切」を祈ったという。

この記事を目にしたのは、足利へ前回赴いてから大分時が経過していた。改めて門田稲荷の実情を成城の大学院生に見せたいと思い平成二十二年（二〇一〇）三月に総勢十数名で押しかけた。ところが絵馬懸の様相が一変しており、写真や藁人形の類は消え、底抜け柄杓も古いものが散見される程度であった。おどろおどろしいもの、いかがわしいものが一切姿を消し、スマートな絵馬懸に

変わっていたのである。ただし、絵馬の願文の内容はエスカレートこそすれ、つつましやかになる兆もない。それはともかく、見事なほどの変身ぶりはおそらく宮司さんの代替わりが一つの要因だろう。それ以上に足利市の町おこし、観光資源化の一環に組み込まれたことが最大の要因と考えている。現に今日では、織姫神社の祭神をイメージした「はたがみ・おりひめ」と、門田稲荷の祭神をイメージした「かどた・みたま」が、足利市応援のマスコット人形として活躍中である。

四、福岡市・野芥縁切地蔵尊

天明五年（一七八五）から寛政十一年（一七九九）にかけて、加藤一純その他によって編纂された『筑前國続風土記附録（中巻き）』の野芥村の項に『御子殿地蔵ミヤノウエ里民縁きり地蔵といふ』[21]とある。また文化年間から文久年間にかけて編纂された『筑前國風土記拾遺（下）』にも同様の記載があり[22]、一八世紀後半にはそれなりに知られた存在であった。廃藩置県の翌年、明治五年（一八七二）から八年（一八七五）にかけて編纂された『福岡県町村地誌』「野芥村」の項には、由来を含めてより詳しく記されている[23]。

小堂三所

観音堂。宮ノ下。地蔵堂。村ノ南一町宮ノ上ニアリ。里民縁切地蔵ト称ス。夫婦睽離ヲ欲スル者。此二祈レハ験アリト云。俗説ニ糟屋郡長者原ニ住メル長者ノ女。重留村ノ長者ニ嫁入シケル途中此所ニテ其壻頓死セシトテ入輿ヲ止メ来ルヲ聞キ。終ニ自殺スト云。今モ傍近諸村ニ嫁スル女此所ヲ避テ通ラス。

地蔵堂。川窪。

長者の息子と娘の婚儀がまとまったものの、故あってかなわず娘が悲運の死を遂げた。その娘の死を痛み、遺族や周囲の者が仏を造像して祀るに至る、というこの種の話は縁起としてすこぶる類型的である。この縁起の内容は、昭和十一年（一九三六）刊行の『筑前の傳説』に詳しく取り上げられている。(24)

和銅のころ、同郡（早良郡＝筆者註）重留の里にゐた舞星（土生（はぶ））長者の富永修理太夫照兼の子兼縄は、糟屋郡長者原の大城長者曽根出羽守国貞の娘と婚約が成立して聟入の日も決定した。かねて主家の横領を企てゝゐた修理大夫の重臣土生重富は、この吉事を破毀しやうと思って姫の行列が野芥にさしかかるや、使を派遣して「花聟は急死した」と偽って告げさせたので、貞節な姫は早や行くべき家もないので、夫に殉じてこの里で自刃し、七つ車に積

ませた嫁入り道具はその西方一里許の所に埋めたので、其處を七車（七隈）と呼ぶやうになった。悲しい最期を遂げた姫を弔ふために野芥に一体の石地蔵が建立されたが、縁切地蔵として男女の仲を呪ふ人達にその石像は何時の間にか削り取られてしまって（傍点筆者）、今では三尺位のものが、路傍の小さい堂の中に安置されてゐる。この近くの村に嫁入りする女はこゝを避けて通る習慣があった。この近くの七隈原の路傍には土生（はぶ）長者の屋敷跡といふのがあって、里の人は俗に「土生藪」と称してゐる。

尚一説には姫の嫁入りに先達って、或事情のために兼縄は自家を出奔したので、両親は乏を頓死の態に装ひ、使を以て野芥に之を急報したので、姫は自害したとも傳へられてゐる。

ちなみに姫は自害に際して遺言を残し、その中には「私のような不運に泣く人達をあの世からお守りするため、壻になる人がなくなった野芥に地蔵を祀って下さい。祀られた地蔵を削って飲ませると、縁談で悩む人の苦しみは消えてしまうでしょう」と書かれていたという。[25] 臨終に際して遺言を残し、その後現世利益をもたらす神仏として祀られるに至った例は、近世の霊神によく見られるパターンであり、[26] 縁起（伝説）では「和銅のころ」とあるもの、目下のところ近世までしか溯れない。また、縁起に「縁切地蔵として男女の仲を呪ふ人達にその石像は何時の間にか削り取られてしまって云々」とある部分についてだが、今日でも、削り取った地蔵

写（6）　福岡市・野芥縁切地蔵尊奉納絵馬
（佐々木哲哉「福岡県の民間信仰」1973年より）

の石を飲み、相手にも飲ませると、その縁を切ることができると伝えられている。板橋の縁切榎の樹皮の効用と共通するが、こちらも近年はほとんど実行されていないようである。

地蔵を削り取ってそれを飲み飲ませ、願いがかなったらお礼詣りに出向き、洋服姿の男女が背中合せでうつ向きかげんに立つ絵馬（写（6）参照）に、名前と年齢を記して奉納するというのが元来の形だったようである。しかしながら、現在ではお礼詣りではなく、祈願に際して奉納される模様で、しかもその数は筈かでしかない（写（7）参照）。絵馬はお堂のある近くで販売しており、上辺両端が横に伸び、両辺も脚状になった鳥居型のもので、博多区千代・崇福寺の門前の絵馬師作成のものを仕入れているという。お堂の中央入口付近には削り傷で見るも無残な石像（らしきもの）が据えられ、内壁の三方には三段に横木が渡され、

絵馬やら願文入りの封筒、一紙物に願文を書き綴ったもの、「急々如律令」と記された紙人形等が所狭しと打ちつけられている。

筆者が出向いた平成二十五年（二〇一三）三月二十七日の時点で、ざっと数えて見たところ絵馬一五点、封書三八三通、紙人形二躰の他、むき出しの一紙物も何葉かあって、「縁切、縁切、縁切……」と紙一面にビッシリ書かれたものも見られた。封書の内味まで見る訳にはいかず、一紙物や絵馬、あるいは封書の上に書かれたものをざっと見渡すと、夫や妻との縁切り、不倫がからむものに自ら奉納するほか、親が息子や娘を気遣って、望ましからざる相手との縁切を願うものも認められた。金遣いの荒い父親や、いやなクラスメイト、意地悪でおこりんぼのサークル仲間との縁切を願うケースも少なくない。不景気だけに貧乏からの脱出や不治の病との絶縁を願う文面も確認できた。毎年地

写（7） 福岡市・野芥縁切地蔵尊奉納絵馬・願文（2013年３月、松崎撮影）

蔵盆の折に、野芥縁切地蔵尊管理委員会なる地元の組織の面々が、お焚き上げによってこれらを処理するということであり、先にあげた数字は、前年の地蔵盆以降奉納されたものと見て良い。

結びにかえて

小稿では、板橋区・縁切榎、足利市・門田稲荷、福岡市・野芥縁切地蔵尊を対象に、その歴史的変遷を辿りつつ現状を確認した。祀られる対象は三者それぞれであり、縁起もさまざまである。ちなみに、後者に関連してこの習俗の歴史を見ると、目下のところ近世中期を溯ることはできないが、祈願方法は随分と変化を遂げたように思われる。

縁切に効験があるだけに、嫁入りに際して行列はこの前を避けて通るという点では共通性があり、皇族や貴族の姫達の将軍家降嫁のルートにある板橋の縁切り榎はそのために一層有名になり、多くの記録、伝承が残されている。

祈願方法について見ると、縁切榎、野芥地蔵尊の場合は、榎の樹皮や石像を削って何らかの形で相手に飲ませると効果があるとされ、絵馬は願満の折に御礼として奉納するものであった。しかし今日では、祈願のために前もって奉納するケースがほとんどで、樹皮や石像を削り

取ることはない。門田稲荷の場合は、丑刻詣りの形が取り入れられ、藁人形に写真をつけて釘で刺して祈願する、というおぞましいものも見られたが、ベースとなるものはやはり絵馬を祈願に際して奉納するというものであった。その絵馬は、男女が背中合わせにして立っていたり座っている姿のものが古い型であるが、男女の縁切りにとどまらず、諸々の人間関係の絶縁、難病やいじめ、リストラや貧乏との絶縁等縁切の内容の多様化に対応し、汎用性のある図柄へと変化した。

しかしながら、図柄の変化以上に際立つのは願文の方である。従来は絵そのものに願いを託し、男女の名前と年齢だけを書き、つつましやかに奉納するというものだった。今日のそれは、文字、文章表現を通して単刀直入に願いを神仏に送り届けるというもので、「縁切」と紙一面に書き連ねたり、「お願いします」と何度も繰り返す懇願、強請姿勢のものもある。

また、絵馬奉納を省略し、願文を封書に入れて祈願する、という方法が主流になった野芥地蔵尊のような例もある。「図柄を通してではなく、文字に願いを託す」というのが何事もスピーディでせっかちな人間が多くなった昨今の、この種の習俗の姿である。なお、一九五六年に『もの言わぬ農民』（岩波新書）という書物が刊行された。当時の農村は、この題名の通りであった。それから六〇年近く経って、都市は勿論農村でも会話が弾むようになり、皆早口、冗談好き、饒舌になるとともに文章力も上達した。一方で、お互いシリアスな話、やりとりはしないとい

う。[27] 稀薄な人間関係が社会を覆っているのである。それ故悩みや思いをこと細かに書き記しても、家族や知人ではなく神仏に渡し、聞き留めて欲しいと願う方向に走るのである。自分の気持ちを共有してくれる存在にメッセージを伝えたい、という点ではツィッターへの書き込みと共通する部分も無くはないが、現状脱出願望が強いだけに、神仏を頼りとするものと思われる。

註

（1）小泉凡「縁切」『日本民俗大辞典』上　吉川弘文館　一九九九年　二一九頁。
（2）小泉凡「縁切」前掲書。
（3）小泉凡「縁切」前掲書。
（4）井ノ口章次『日本の俗信』弘文堂　一九七五年　六～一二頁。
（5）岩井宏實『絵馬』法政大学出版局　一九七四年　一八一頁。
（6）岩井宏實『絵馬』前掲書。
（7）柳田國男『神樹篇』実業の友社　一九五三年（『定本柳田國男集』一一巻所収　筑摩書房一九六四年　一一五頁。
（8）小花波平六「板橋の生活と民俗」『板橋区郷土資料館紀要』七号　同館刊　一九八八年　四～八頁。
（9）長沢利明『江戸東京の庶民信仰』三弥井書店　一九九六年　一三一～一五一頁。
（10）常光徹「縁切榎の俗信」『妖怪の通り道～俗信の想像力～』吉川弘文館　二〇一三年　五一～五三頁。
（11）佐々木哲哉「福岡県の民間信仰」『九州の民間信仰』明玄書房　一九七三年　六〇～六一頁。

(12) 泉貞代「縁切榎」『いたばし郷土史辞典』板橋史談会　一九八九年　一八五頁。
(13) 板橋区郷土資料館他編『街道開設四百年記念　中山道』同館他刊　二〇〇二年　二六頁。
(14) 板橋区役所編刊『板橋区史』一九五四年　三六八頁。
(15) 板橋区役所編刊『板橋区史』前掲書　三六九頁。
(16) 小花波平六「板橋の生活と民俗」前掲論文　五頁。
(17) 板橋区役所編刊『板橋区史』前掲書　三六九～三七〇頁。
(18) 十方庵敬順（朝倉治彦校訂）『遊歴雑記』平凡社東洋文庫　一九八九年　二七三～二七四頁。
(19) 長沢利明『江戸東京の庶民信仰』前掲書　一四一～一四六頁。
(20) 丸山太一郎「八幡村の縁切稲荷」『郷土研究』二巻一号　一九一四年　五三頁。
(21) 加藤一純他編（福岡古文書を読む会校訂）『筑前國続風土記附録（中巻）』文献出版　一九七七年　四一九頁。
(22) 青柳種信編（福岡古文書を読む会校訂）『筑前國続風土記捨遺（下）』文献出版　一九九三年　二五五頁。
(23)「福岡県町村地誌」『福岡県史近代史料編　福岡県地理全誌』福岡県　一九九五年　三九～四七頁。
(24) 佐々木滋覚『筑前の傳説』九州土俗刊行会　一九三六年　六九～七〇頁。
(25) 福岡県広報室編『郷土物語』三集　一九七一年　二～三頁。
(26) 宮田登『生き神信仰』塙書房　一九七〇年　二九～三三頁。
(27) 稲垣吉彦「饒舌と軽口の時代」『現代日本文化における伝統と変容Ⅰ・暮らしの美意識』ドメス出版　一九八七年　一〇一～一二三頁。